

平成17～19年度SELHi 研究開発実施報告書〔研究開発の概要〕

- 1 SELHi 学校名 秋田県立能代北高等学校
- 2 研究開発実施期間 平成17年度 ～ 平成19年度
- 3 研究開発課題 「異文化理解」、「受信型コミュニケーション能力」、「発信型コミュニケーション能力」からなる、「対話型コミュニケーション能力」を育てる指導方法の研究

4 3年間の取組内容

(第1年次)

(1) 「異文化理解」

① SELHi 特別講義の実施

秋田大学、国際教養大学、千葉大学の協力を得て、英語学習や異文化コミュニケーションをテーマに特別講義を実施した。

② 海外姉妹校との交流

オーストラリアシドニー州近郊の Tyndale Parent Controlled Christian School で3週間ホームステイをしながら語学研修を実施した。また韓国ソウル市にある養正高校とも姉妹校となり、11月に養正高校の職員・生徒が本校を訪問した。全校での歓迎会や両校生徒の英語による合同授業などを行うとともに、本校生徒宅にホームステイしながら交流を深めた。

(2) 「受信型コミュニケーション能力」

① 英語による学級活動（英語による HR、学級日誌）

② 学校の英語化（英語による校内表示・「SELHi 便り」の発行）

③ Content-based Teaching, 英語以外の教科を英語で指導する研究

世界史B（英語科1年）フードデザイン（英語科3年）異文化理解（英語科2年） 年6回実施

④ NHKラジオ講座の活用

(3) 「発信型コミュニケーション能力」

① 音読スタンプカード、Jazz Chants の活用

② Show & Tell, インタビューテストの実施

③ 英単語の言い換えや教科書本文の Retelling

英語科1年の総合英語、普通科1年の英語Iで実施した。自分の知っている単語を使って相手に説明する活動や、キーワードを使って教科書本文の内容を Retelling する活動を取り入れた。

④ 英語集中セミナーの実施

国際教養大学の協力を得て、英語科1年、2年それぞれ1泊2日で実施した。英語のコミュニケーション活動、グループプレゼンテーション、キャンパスツアーなどのワークショップを行った。

(第2年次)

(1) 「異文化理解」

① SELHi 特別講義の実施（前年と同じ）

② 海外姉妹校との交流

オーストラリアメルボルン市近郊 Norlane High School において3週間の語学研修を実施した。また、韓国ソウル市 養正高校を本校生徒代表9名と職員が訪問、ホームステイを体験しながら養正高校生徒と交流を図った。

(2) 「受信型コミュニケーション」

① 英語による学級活動（英語による学級日誌、HR 英語科1年、2年）

学級日誌を英語で書くとともに、前の人の日誌の内容に対するコメントを書くようにした。

- ② 学校の英語化（「SELHi 便り」の発行）
 - ③ Content-based Teaching、英語以外の教科を英語で指導する研究
世界史 B（英語科 2 年）、家庭基礎（英語科 2 年）
 - ④ NHK ラジオ講座の活用
- (3) 「発信型コミュニケーション」
- ① 音読スタンプカード、音読マラソンの実施
 - ② Show & Tell（1 年）、1 分間スピーチ（2 年）、インタビューテストの実施
 - ③ キーワードを用いた Retelling, ミニディベート、サーキットスピーチ

英語 I（総合英語）、英語 II（英語理解）、リーディングなどの授業において和訳先渡しで日本語の説明をなくし、基本的にオールイングリッシュで授業を行った。ペアワークを多く取り入れ、生徒の受信・発信能力の向上を目指した。1 年生全クラスでキーワードを使った Retelling を取り入れるとともに、英語科 2 年の英語理解の授業においては上記の Retelling に加え、一つの命題に対して賛成・反対の立場から考える活動を取り入れた。ブレインストーミングを行った後に、キーワードを使ったミニディベートを実施し、またディベートの基礎演習として相手のスピーチを聞いて要約して発表するサーキットスピーチを異文化理解の授業に導入した。

- ④ 英語集中セミナーの実施（第 1 年次に同じ）

(第 3 年次)

(1) 「異文化理解」

- ① SELHi 特別講義の実施（前年と同じ）
- ② 海外姉妹校との交流

オーストラリアメルボルン市近郊 Norlane High School において夏休み期間中に 3 週間の語学研修を実施した。9 月にはオーストラリアから Norlane High School、Western Heights Secondary School 両校の代表生徒、職員が来校し、2 週間本校生徒の家庭にホームステイしながら、全校生徒と交流の機会を持った。

(2) 「受信型コミュニケーション」

- ① 英語による学級活動（英語による学級日誌、HR 英語科 1 年～3 年）
学級日誌を英語で書くとともに、前の人の日誌の内容に対するコメントを書くようにした。
- ② 学校の英語化（「SELHi 便り」の発行）（前年に同じ）
- ③ 朝の速読練習（週 2 回）

(3) 「発信型コミュニケーション」

- ① 音読スタンプカード、音読マラソンの実施、教材「Tell Me More」を利用した対話、発音練習
- ② Mini-debate の実施

(A) 授業のはじめの 5 分を使って、自分の意見を述べ、それに対して反駁する練習
(これまで取り上げた主な命題) We should have recess. /

We should do club activities outside school. / When we are sleepy, we should stop studying and go to bed. / Elementary school children should be allowed to have their cell phones. /

Hospitals should have “baby hatch” or baby drop-off point /

We should be free from school on Saturdays. /

Students should take dance and martial arts lessons at junior high schools.

(B) 教科書の内容に関連している命題について、賛成・反対の立場から意見を述べ、キーワードを使って自分の意見を述べる練習

Voting age should be reduced to 18. / We should stop industrialization to protect the earth.

We should stop importing food. / We should use bioethanol.

- ③ インタビューテストの実施

5 研究開発の概要 (成果と課題)

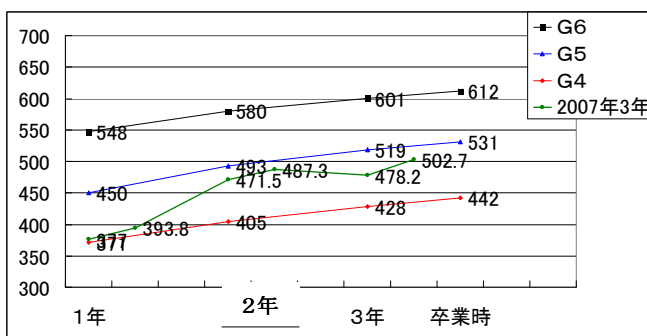
(1) 生徒の英語力の向上

教科書の内容を要約したり、一つの命題について賛成・反対の立場からディスカッションをし、最後に自分の意見をまとめたりする活動により、対話型コミュニケーションの向上が見られた。スピーキングやライティングにおいて、辞書でひいたままの難しい表現を使用するのではなく、自分の知っている単語を駆使することをポイントとしたため、最初は難しくても、慣れてくるとコミュニケーションに対する抵抗が少なくなったようである。そのため、インタビューテストにおいては、1年次に比べて3年次の方が笑顔やアイコンタクトが見られ、リラックスしている様子は明らかである。また、質問に対する答えに即答できないときも、ジェスチャー等を駆使してALTに伝えようとする姿勢が見られ、非言語によるコミュニケーション能力にも向上が見られた。

GTEC 英語コミュニケーション能力テストの結果にも、生徒の英語力向上が見られる。

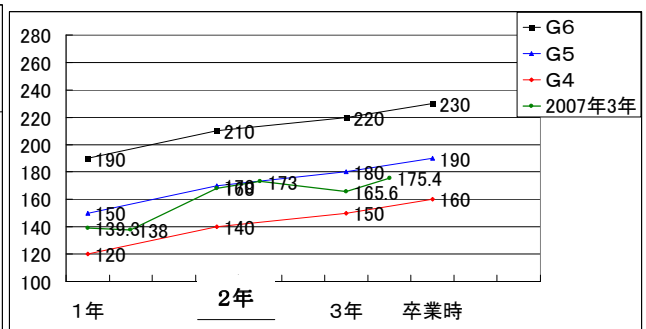
(参考) GTEC 英語コミュニケーション能力テスト

Total (3年間)

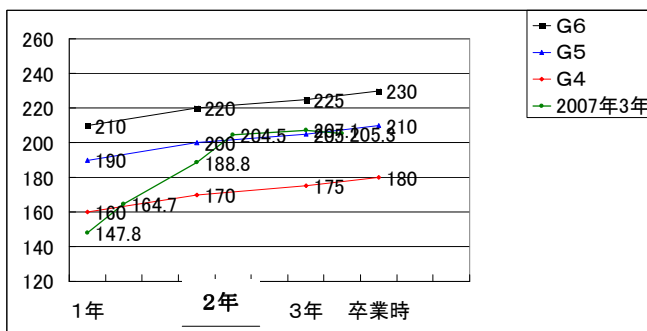


Reading (3年間)

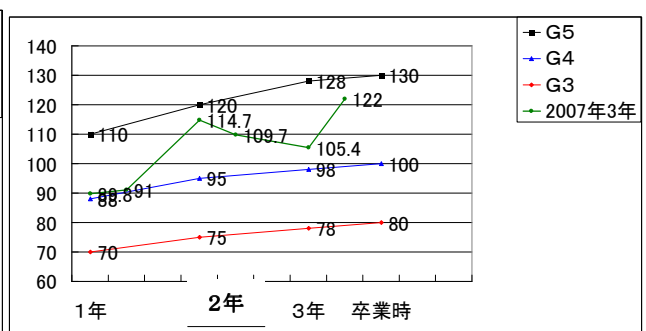
* G 4が平均レベルである



Listening (3年間)



Writing (3年間)



最も顕著であったのが、リスニングの伸びであり、グレード6には5人の生徒が、グレード5以上にはクラスの半数の生徒が達している。これは1, 2年次の朝学習におけるラジオ講座の活用や、授業やSHRにおけるほぼオールイングリッシュの活動、英語による学級日誌、Mini-debate を通じて英語による対話の機会が多かったことの成果であると考えられる。また、スラッシュリーディングを通して教科書の英語を頭から理解する活動も3年間続けたが、後戻りをせずに意味をとっていき練習が、リスニングをする際の内容把握にプラスに働いたようだ。ライティングにおいては、2年次には題材に対する発想力に欠けていたためにスコアの減退が続いていたが、さまざまな話題について賛否両論を表現する活動を続けたため、3年次の最後には高いスコアを獲得することができた。3年間、英語で学級日誌を書き、必ず前のエッセイに対するコメントを添え続けたことも一つの要因だと考えられる。グレード5には5人の生徒が、平均のグレード4以上にはクラス全員が達し、レベルの向上が見られた。

(2) 生徒の英語学習に対する情意面の変化

生徒の意識変化を調査するために Can-Do テスト (5段階評価) を実施したが、その中で顕著な伸びを見せた項目が「勉強すれば、きっと英語の力は伸びると思う」「自分の視野を広げるのに英語学習は有意義

だと思う」「英語を話す人たちとのやりとりに使いたいので勉強する」であり、英語学習に対して、積極的かつ前向きな傾向が強まった。また、能力面においては、「幅広い話題について話し合ったり（問題点や原因などを考えながら）、討論したり（賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する）ことができる」という項目において、英語科の生徒における自己評価が高まった。これは、さまざまな活動を通して、英語を単なる目的とするのではなく、コミュニケーションの手段として活用している意識が強くなったためだと考えられる。

(参考) Can-Do テスト (5段階評価) の推移 (一部)

- 勉強すれば、きっと英語の力は伸びると思う。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
普通科3年	2.9	2.6	3.8	3.9	4.0	4.3
英語科3年	4.0	4.4	4.3	4.3	4.0	4.7

- 自分の視野を広げるのに英語学習は有意義だと思う。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
普通科3年	2.9	2.6	3.8	3.6	3.6	3.8
英語科3年	3.4	4.2	4.3	4.1	4.3	4.4

- 幅広い話題について話し合ったり(問題点や原因などを考えながら)、討論したり(賛成と反対の立場から相手を論理的に説得する)ことができる。

	1年1回目	1年2回目	2年1回目	2年2回目	3年1回目	3年2回目
普通科3年	2.9	2.9	1.8	1.9	1.9	2.1
英語科3年	2.0	2.5	2.6	3.0	3.1	3.5

(3) 国際感覚の伸張

オーストラリアでの海外研修や英語キャンプを通して、参加した英語科の生徒は英語や文化に対する意識を高めた。さらに最終年度にはオーストラリアからの生徒が本校を訪問し、ホームステイを受け入れたことで、普通科の生徒も異文化への理解を深め、さらなる英語学習を通して国際交流をしていきたいという意識が強くなった。

(4) 授業改善

共通のワークシートを作成し、和訳先渡しによるキーワードを使った授業のスタイルが固まり、教員が共通理解を持つようになった事が一番大きな成果であると思う。音読指導を重視し **Overlapping** や **shadowing** を授業で徹底して行うことで、**Input, Intake, Output** を意識した授業を行うことができた。賛成・反対の立場から行う1分間スピーチも継続して実施している。教員が英語を使用する頻度も格段に増し、定期的に研究授業を実施することで情報交換の機会も増えた。

6 3年間の取組を生かす今後の計画

- (1) 本校の研究内容で確立した **Retelling** や音読を用いた指導、1分間スピーチや **Show & Tell**、賛成や反対の立場から意見を述べる活動を取り入れた指導方法を今後も継続して行うとともに、他校との連携・情報交換をさらに進め授業改善を継続するとともに、情報発信に努める。
- (2) リーディング力の育成として多読や **Reading Strategy** を指導するとともに、表現力や論理的に考える力を高めるために国語科との連携を図り、総合的なコミュニケーション能力の向上のために継続した指導を行う。

研究主任 教諭 高橋 哲

TEL 0185-52-3127

FAX 0185-52-3128